

Title	地方史研究協議会編 日本産業史大系：第4巻 関東地方篇
Sub Title	
Author	尾城, 太郎丸
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.4 (1960. 4) ,p.413(107)- 414(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19600401-0099
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

『近代日本思想史講座』

人類の社会・経済生活についての史的研究は戦後めざましい発展をみたが、それに比して、精神生活―思想の史的検討は必ずしも十分ではなく、たとえ思想が考察された場合にも、観念的・思弁的な試みが多く、具体的に、その内容がとわることが少なかった。しかし、最近に至り、「思想」の史的発展についての研究が進められ、例えば、金子武蔵・大塚久雄編「近代思想史」(弘文堂全九巻)、遠山茂樹・山崎正一・大井正編「近代日本思想史」(青木書店、全三巻)、家永三郎「日本近代思想史研究」(東京大学出版会)等注目すべき業績が出た。

本講座は既刊四冊を出したのみであるから全般についての批判は他日を期さねばならないが、本講座が意図するところはほぼ明らかである。本講座は近代日本を全構造としてと

一〇六(四二二)

らえんとした。内的及び外的的制約から解放され自由なる研究と発表が行なわれるに至った今日、まず旧来タブーとされてきた「天皇制」、その精神構造を検討し、それによって制約されていた近代日本の特殊性と普遍性を思想の場において前向きな形でとらえんとした。それ故、本講座は「近代日本」の思想史であり、近代日本における思想史、近代日本を対象とした思想史、精神構造史を目的としたものである。既刊第一巻(歴史の概観)は、他の諸巻がそれぞれ問題史的に論述を進めている(第四巻知識人の生成と役割、第六巻自我と環境、第七巻近代化と伝統等)のに対し、全体を総括し、一つの史的展望を与えるために書かれており、時代に即して、封建社会における近代思想の先駆、近代思想の誕生と挫折、曲折する近代思想の成長、近代思想の空白、戦後思想とその展開が論ぜられている。これらを検討する場合、その方法としてマルクス主義の真理性は否定されていないが、観念的な反映論や相互作用論に止ることを拒否し、ある意味でマルクス主義と一線をかくしていることが注目されよう。それ故日本マルクス主義者が従来なして来た思想や個々の思

想家に対する評価とやや異なった評価をなしている。ほんの一例であるが、大杉栄や片山潜の評価などに見られるごとく、前者に同情的で、後者に対しては「片山潜はマルクス主義史家によるあらゆる神話化にもかかわらず、明治の社会主義者としては失格であった」(第四巻)と。多くの問題が提出され、そこに見られる解答にはさらに検討されるべき多くのものが残されているが、近代日本の思想をややもすれば公式的に、固定的に考えがちな人々にとって反省の資を与えるものである。(筑摩書房刊・A5・全八巻・別巻一冊・既刊四冊)

―島崎隆夫―

A・C・L・デイ著

『貨幣の経済学』

(The Economics of Money: A.

C. L. Day)

この書はホーム・ユニバシティ・ライブラリという有名な双書の中の一つであり、同著者によって、一九五七年に書かれた、『貨幣的経済学概論(Outline of Monetary

Economics)」の入門書、或いは手引書ともいふべき本である。英語は極めて平易で、内容も手際よく簡明に書かれているので、経済学部二年生位には自習書として、又経済学に通常用いられる術語になれるという意味でも、好個のよみものとして推められる。

内容は一国民経済に封鎖してその中の貨幣の役割、イギリス金融機関の機能から開放体系としての国際経済に拡張して、その中の貨幣の働き、国際金融機関及びその機能が語られている。

用いられている手法は巨視的経済学的手法であって、社会会計―国民所得―貨幣との関連で示される。即ち、すべての取引は貨幣を媒介として行なわれるが、その取引を二つに大別する。一は所有する富の追加(減少も含める)によって生ずる取引、二つには、富の総量に関係しない、富の保有形態だけの变化の取引とに分ける。この二つは取引を類別することを意味しているよりはむしろ、取引の考察の仕方に重点がある。我々は富の保有形態を変えなくしては如何なる取引も可能でないからである。著者が意味する前者の取引とは国民所得に直接関係する取引、例え

ば消費者が食糧を買うとか旅行をする等又企業家が工場を建築するとか、機械を購入するとかいう類いであるが、後者は株式から公社債に変えるとかいう場合である。後者は富の保有の型の変化が利率率を通じて、どのよう間接に国民所得に影響するかを考慮する為に前者とは区別された意義がもたれている。しかし焦点は国民所得に絞られて説明せられるが開放体系の場合にも反復説明される。国民所得という視点で貨幣的な問題を統制しているという意味でよい本であろう。なお著者はロンドン大学の講師(Magist)である。

―村井俊雄―

地方史研究協議会編

『日本産業史大系』

(第四巻 関東地方篇)

日本在来の郷土産業は日本資本主義の産業的基盤として二つの問題を担っている。その一つは、幕末維新期における経済段階規定の内容をなすマニユファクチュア形成に関する

歴史的問題であり、その二つは、日本資本主義の構造的矛盾の一つとして今日の中小・零細工業問題につながる現実的問題である。この二つの問題は、日本資本主義の構造規定の上で密接な歴史の関連をもっており、郷土産業、地方産業の歴史的・実証的分析はこの意味で極めて重要な研究分野であるにも拘らず、戦前の日本の郷土史研究には、いわゆる郷土自慢や懐古趣味中心のものが多く、日本資本主義研究の問題意識と結びつくのはまれであった。それゆえ、今回、地方史研究協議会の戦後十年に及ぶ努力の結晶として、全国の広汎な歴史家、社会経済史家、郷土史研究家の参加による「日本産業史大系」の編集計画が実現され、地方史研究と日本資本主義研究の本格的交流が開始されたことは意義が深い。

本「大系」の篇別は、産業史の全般的・理論的問題を取り扱う総論篇一卷と、各地方毎の郷土産業の歴史の実態を記述する各論七巻とより構成され、まず第四巻の関東地方篇がこの程刊行された。本篇では、古代・中世においては後進地帯であった関東地方が、近世とくに徳川時代以降になってどのような産業

的發展をとげたか、その社会経済的条件、各地の生産・流通構造の性格とその変遷、近代化への展望を明らかにすることに主眼がつかれ、その内容は、関東地方経済圏の形成の出发点となった近世江戸の経済を中心として、その大規模な封建的消費経済を漸次満して行くようになる地廻り商品の生産と流通の発展という形で、江戸周辺の農林水産加工品、鉱産物、北関東の織物、その他各種特産物の実態が広範囲にわたって叙述され、民間の農村工業とともに藩の特権的保護産業、さらには明治初期の官営工場による移植近代工業をも含み、これら全体を通じての近代産業への転換とその展望が、結論的に要約されている。

以上を通じての全体としての特徴は、織物等の代表的産業を除いては、その多くが近代化産業資本形成のための条件を生み出し得ず、衰退して行く過程が克明に分析されている点にあり、従来の幕末維新期の経済段階論における一義的な断定、単純化に対する反省と再検討を要請し、かつ段階論の一面性を再考せしめる上で極めて重要な資料を提供したものとといえる。しかし、同時に、考察の仕方

が地方的・個別産業的観点に重点をおき、対象とする時期も主として明治初期までに限定しているため、これら郷土産業の多くが、衰退しつつもなおかつ変質しながら明治以降の日本資本主義の産業構造のなかに再編成され、やがては中小・零細工業の一環として存続・再生産させられて行くことの意味、日本資本主義のなかでのかかる郷土産業の構造的な位置づけ等の問題(冒頭における第二の問題)への手懸りは、本書からは十分に求められない憾みがある。もっとも、この問題は、「産業史の過去と現在をつなぐカナメ」(「大系」編集だより一九六〇年一月)として、本研究の今後に残された大きな課題であろうが、さし当っては続刊のうちの総論篇がこれをどのように取り扱うかが期待される(東大出版会・A5・五六〇円)。

尾城太郎九一

平井新著

『社会思想史研究』

社会思想という学問は、経済思想のみならず

政治、法律、哲学、宗教、芸術、科学などあらゆる分野の思想を対象としなければならないので、そこに思想史を学ぶ者のなみなならぬ労苦と、また誇りとが秘められている。平井教授の新著は、一貫した通史ではないけれども、古代ギリシャの社会思想(ホメロス、ヘシオドス、アリストパネス、プラトン、アリストテレス、ストア)、ヘブライズムの社会思想(旧約聖書の社会思想、メシア思想の起源と進展、イエスの社会思想、原始キリスト教と初代の教父達)、聖トーマスの財産論について、近代フランスの社会思想(啓蒙期の社会主義と道徳哲学―特にモレリイとマブリーを中心として)、ジャン・メリエとその「遺書」、バブーフの共産主義理論、プランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説、ルイ・ブランと「労働の組織」、国際労働者協会(第一インターナショナル)の起源について、「社会主義」「社会主義者」という用語の起源、の諸章に、さらにコンンデランの「社会主義原理―十九世紀民主主義宣言」の翻訳を加えて、特殊研究のまことに広汎な集成である。古代、中世の思想はこれまでと

し、フランス近代思想の研究は日本では特に手うすなので、類書の少ないこの書のユニークな意義は、経済学史におけるE・セリグマンの On Some Neglected British Economists にもたとえられよう。

コンンデランの「宣言」は、「共産党宣言」の種本と騒がれたこともある重要な文書で、教授の手によって昭和三年に三田学会雑誌に訳出されたことがある。これとマルクスとの関係については「共産党宣言剽窃問題」(同誌一九卷六号)にすでにわくわしい。この書と「近代フランス社会主義の潮流」などを併読することによって、近年ようやく盛んとなりつつあるフランス社会思想史の研究に対する教授の先駆的な業績の一端をうかがい知ることができる。(鳩書房・A5・四七二頁・七八〇円) 白井 厚

高村象平著 『ドイツ・ハンザの研究』

事実をして語らしめ、決して飛躍しないというところは、歴史研究で求められる基本的な

態度である。今日この基本に徹する研究の乏しいなかであって、高村教授の新刊は注目されていい。ぜひ一読をすすみたい。そして歴史家として発言するため著者が示したなみなみならぬ努力を学んでほしいものである。本書は、これと前後して一条書店から刊行された『ドイツ中世都市』と共に、教授の学位論文を構成する。序にあるように、著者は、廿五年間にわたり、その完成のため没頭した。本書は、昭和八年以来引続く研究の成果である。一口に廿五年といっても、その間には戦争という大きな事件が介在し、多忙な時期であったことを思えば、終始一つ問題と取組み、地道に研究を続けるのは、そう容易なことではなかった。その意味で、教授の態度は称賛されなければならない。事実を語ろうと思えば、史料に深く沈潜することが肝要である。歴史家にそれができるのは、事実の探究に際しつねに謙虚な態度をうしなわれない限りであった。歴史する心とは何か。読者は本書によってその本質にふれることができるに違いない。史料に向い謙虚に問いかける場合にのみ真実が得られると思うべきである。ところで事実の背後に著者が理解しようとする

したのは何か。序によれば、それは、近世から中世にかけてのヨーロッパで、ハンザの栄光をになった名もない商人たちが、資本主義の発展にどれほど寄与したかを示すにあった。歴史は人によってつくられるといわれる。しかしその人とは、終始かけの存在ではあるが、歴史を動かす実際の力もなった人々のことであった。著者のかかげる究極の目標はささやかなものではあるが、実は歴史家すべてが共通に持つべき性格のものであった。もともとそのことの解明のためにはじめられた経済史であり、経済史の方法が今日わが国でそのまま歴史研究の全体に及ぼうとしているが、著者をはじめ、諸先学の啓蒙によるものであった。著者はハンザ研究を通じて一つの人間像を描こうとした。しかしいまだ不備だらけであると告白しておられる。ロシア語の素養を欠くというだけの理由で、ノイヴゴロト商館にふれようとされないが、残念至極である。研究の地域もあわせて拡大することによって、前進していただきたいと思うのは、筆者のみではあるまい。(日本評論新社・A5・二三八頁・四七〇円) 一渡邊國廣